

# ABIC 国際社会貢献センター

## Information Letter

No.15 2006年3月

### 海外での活動

ODA 関連	ボリビア事情	2
	J-Front事業視察	3

### 国内での活動

自治体への協力	宮城県企業誘致担当として2年	4
	ABICと私	5
外国企業支援	オーストリア金型メーカーの訪日アテンド記	5
教育	大学等講座での活動	
	商社マンから大学教授へ…!	6
	立命館APUにABICが3講座開設	7
	立命館アジア太平洋大学(APU)と学術交流協定書を締結	8
	小中高校向け「国際理解教育」	
	国際理解—高校教育と校外企業人講師の協力関係について	8
	日本の学校に入学してくる外国籍の小・中学生への日本語指導	9
	ABIC・関西学院大学との共同プロジェクト	
	アメリカ理解教育の普及活動	10
関西での活動	北陸大学の想い出	10
留学生支援	ABIC講師が東京国際交流館「国際塾」講師	11
事務局だより	会員入会のお願い	12

---

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター(ABIC) <http://www.abic.or.jp>  
Action for a Better International Community

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1  
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内  
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979  
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】  
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室  
Tel & Fax : 06-4395-1188  
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## ボリビア事情

JICAシニア海外ボランティア  
ボリビア輸出振興

堀江 善治（元丸紅）

ボリビアは、長年の政情不安定と社会不安を抱える中、昨年12月に大統領選挙が行われ、左翼社会民族主義者で、アイマラ先住民出身であるコカ栽培農民代表エボ・モラレス氏が大統領に選ばれた。これはボリビア国独立1825年以来初めての社会主義政権であり、しかも初めて先住民族が大統領に選出された画期的出来事と言える。彼はアンデス・アマゾンにおける中南米のインディオの最高権力者（Apumallku）と認められた。ボリビアだけでもアイマラ、ケチュアをはじめおよそ38の原住民族がいると言われているが、全人口の半数以上を数えるこのような原住民に対する長年にわたる差別と、いっこうに変わらない歴代政権の汚職・腐敗体質に対する反発によるものと考えられる。多くの社会経済問題を抱えてはいるが、これからエボ・モラレス大統領の下、新生ボリビアの構築が大いに期待されるところである。

ボリビアは日本ではあまりなじみのない国だが、日本との関わりは深く、知っておかなければならぬ国一つと言える。ペルーに移民した日本人が当国北部のリベラルタに再移住したのが始まりで、1999年には移民100周年が祝われた。

リベラルタは当時ゴムの木が多く生長し、世界的需要も高いことにより、一獲千金を夢見て移住したものと思われる。現在では日系5世ぐらいまで入れて、日系人約14,500人（うち我々のような短期駐在日本人はおよそ300名）がボリビアに定住しており、うち約7,000人が最初の移住地ペニ県リベラルタに住んでいる。さらにはサンタクルス県には、サンファン、オキナワと2つの移住地があり、サンタクルス市内を入れて3ヵ所で、各々約800人が定住している。南米最貧国の一つと言



神秘的なチチカカ湖を背景に筆者

われ、貧困解消のため、これらを背景に日本から毎年多額の援助が行われている。

標高3,600mのラパスに生活して思うことは、実質的な首都にもかかわらず、空気汚染がなく、紺べきの空の下、高さ6,480mとそびえ立つイリマニ山を美しく描き出している姿は、世界でもたぐいまれな絶景と言え、これを見ていると、この貧困な環境を忘れてしまうほどである。物価も安く、特に食料関係は、品物にもよるが、実感として日本の半分から10分の1程度で本当に安く感じる。ただし、PC関連製品、インターネット関係の費用は逆に非常に高いのが対照的である。

輸出促進活動を通じて、ボリビア経済の問題点をいくつか垣間見ることができる。大きくは2つある。1つは政府、公企業、民間法人企業のフォーマルセクターと、民間非法人企業、家族・個人企業のインフォーマルセクターがあるが、インフォーマルセクターは正規の税金の未払い、法の遵守の欠如など国への経済貢献が極めて低いため、これをいかにフォーマルセクターに移行させるかという課題である。もう一つは健全企業の育成をはばんでいるコントラバンド（非合法輸入）で、この撲滅が国にとって不可欠である。輸出に関してはそれなりに優れた企業もあるが、全体的には企業規模が小さすぎること、そして国際ビジネスに対する知識と基本教育が欠如していることである。したがって当国主要都市6ヵ所で国際ビジネス啓蒙のため、セミナーを開催した。国際ビジネスにあたっての心構えと進め方に関し

理解を得られたと思うが、この種の基本教育は継続して行われることが肝要で、今後は当地輸出振興機関で



国際ビジネスセミナー（コチャバンバ）

あるCeprobo（日本のJETROにあたる）が主体的にを行うことになる。

ボリビア政府の方針としては、伝統的な天然ガス、金、銀、亜鉛といった天然資源に頼るのではなく、工業製品の輸出拡大をめざしている。具体的にはアルパカ、リヤマを素材とする繊維製品、宝飾品、皮革およびその製品、木材製品等である。残念ながら2005年の統計ではその方針とは逆に、輸出全体の27.3億ドルのうち、鉱産物が69%、農林産物22%、工業品9%と、工業品がこれまでの10%強のシェアを下回る結果となった。ただ、輸出全体としては、過去5年間順調に伸びてきており、2005年は鉱産物の国際相場高騰もあり、前年比24.6%も伸びた。ちなみに2004年は21.6億ドルで、前年比なんと38%増を示している。

ボリビア経済の将来は、天然ガスをはじめとする豊富な資源からの収入を有効に使い、国の重点志向の産業をグローバル競争に打ち勝つ水準に育成することにかかっていると言えるだろう。

## J-Front事業視察

ABICメコンデスク・コーディネーター

吉川 和夫（元トーメン）

私は2005年末、「J-Front事業」の評価委員としてタイ国に出張し、「グリーン調達管理モデル」の実証事業の視察をした。と書き出しても背景や仕組みをご存知ない方もおられるので背景を説明する。

技術援助の方法として外務省系のJICAが行う専門家やシニアボランティア派遣、一方では経済産業省系のJETRO、AOTS、JODCが行う各種援助事業がある。その中にJETROが経済産業省と組んで実施するJEXSA（貿易投資円滑化支援事業）とJ-Front（先導的貿易投資環境整備実証事業）がある。JEXSAはアドバイザーや調査員の派遣である。ABICでは、JETROがインドの商工会議所やメコン流域6ヵ国共同商工会議所等にアドバイザーや調査員を派遣する際、求めに応じて会員を推薦し、採用された。

今回説明するのはJ-Frontである。平成16年度より開始された。企業が単独またはグループで貿易投資環境整備事業をする際、先導的であり公共性があるものは申請してJETROから補助金が受けられる制度である。厳しい審査があるが、16年度は10プロジェクト、17年度は9プロジェクトが選定

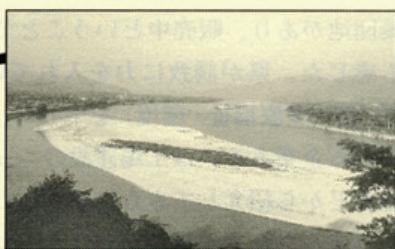
された。案件の内容によるが審査に基づき数千万円の補助金が支給される。1億円が限度である。

選定に当たっては、事務局のほかに外部から審査・評価委員として7名が選任された。学界3名、業界関係4名である。私も委員の端くれとして昨年に続き今年も選ばれた。委員はプロジェクト選定の際に関わると同時に、選定されたプロジェクトが計画通り実施されているかどうか視察・評価する必要がある。

昨年度は、生体認証技術を活用したID基盤構築の実証をタイ国で、無線IP電話システムの実証をタイ、ラオス、ミャンマーの3ヵ国国境地区で視察した。前者は、銀行カードに使用され始めた指先や掌の静脈利用の認証方法である。後者では、僻地のタイの小学生が上記システムを仮設した同地の大学を経由してバンコクとインターネット、次いで埼玉県の小学生とTV電話で交信することができた。

今年度は書き出しの通り、グリーン調達管理モデルの実証事業を視察した。世界的に環境汚染防止の製品づくりが進行する中、EUは特定有害物質の使用を禁ずるいわゆる“RoHSの指令”を制定し、2006年7月より適用する。グリーン調達の強化である。EUに輸出する製品10カテゴリーはその適用を受ける。現在は電機、電子製品が対象の大部を占める。タイ国では東芝（株）がリーダーとなり、三菱電機系のKYE社、数社の部品会社がグループを作り、タイ国政府のEEI（Electrical and Electronics Institute）と共にRoHS指令対応の管理モデルの試行中である。対応済みとの認証を受けられなければ輸出できないゆえ、輸出企業は真面目に取り組む。私は出張の際、関係者の会議に立ち会い、関係先のラボや工場を視察した。まだ最終段階ではないが、本件は計画通り実証され、実行に移され、輸出に貢献するであろう。

従来日本のODAは、グラント案件といえども相手国の申請があって初めて実行されていたゆえ、日本側の



タイ、ラオス、ミャンマー三国の国境。左上がミャンマー、右上がラオス、そして写真を撮っている場所がタイ領。俗にゴールデン・トライアングルと称される。乾季で水位が低くなる年の初めに中州が現れる

## 海外での活動

指向するところと異なるケースがあり、またハコモノが多く、とかく批判を受けた。このJ-Frontは金額が比較的少額であってもソフトの占める比率が高く、ハードの紹介も行われ、また日本の規格を普及させる手段

ともなり得る。日本側の意向が反映するODAを実現するため先導的な役割を果たし、従来のものより一歩進んだ手段である。発展を期待したい。

## 国内での活動

### 自治体への協力

#### 宮城県企業誘致担当として2年

宮城県東京事務所参与

みす 翠政之(元丸紅)



丸紅を卒業してボランティア活動でもやろうかなと考えていた一昨年の春、ABICからのメールで宮城県が企業誘致の嘱託を募集していることを知った。そのような業務の経験は全くなく自信は無かったが、社会人としての長年の経験と人脈を生かした業務とのことだったので、取り敢えず手を上げたところ、直ぐに決まってしまい、2004年4月から東京事務所に週3日勤務することになった。後で知ったが、宮城を含め多くの地方自治体が我々のような民間出身者を企業誘致などの産業振興分野で雇用し始めているとのことであった。

最初に仙台の本庁で講習を受け、関係施設を見学したが、さすが東北の中心だけあって東北大学との产学研連携の体制も整っていることなど企業誘致しやすい環境があるという印象であった。ただ県内には42の工業団地があり、販売中ということでこれは大変だなとも感じた。県が誘致に力を入れている重点4分野（食料・IT・医療福祉・環境）を中心に、最初は自分の知っている企業あるいは工場建設のニュースがある所は丸紅などから紹介してもらい訪問したが、なかなか脈がありそうな企業が見つからなかった。当時はシャープの亀山進出が企業誘致として話題になっていたが、これはあくまで例外的なケースで、大半の企業は新工場建設をするとしても中国など海外を考えていたようだ。

ところが半年位経った頃、ある食品流通業者が現地のスーパー向けに配送センターを作ることとなり、その土地探しのお手伝いを始めた頃から様子が変わってきた。我々も手持ちの工業団地を紹介したりしたが、民有地の情報も集めることとなり、ゼネコンなどと接触したところ、結構多くの企業が宮城県への立地を検討しているらしいということが分かってきた。このため従来より幅広い分野の企業を対象とし、また外資なども訪問して情報収集に努めた結果、立地しそうな企業が数社現れ、いくつかが立地を決めた。

また、各自治体には誘致企業に対する助成金制度があるが、実際に進出しても最近の傾向として自分で工場・倉庫を建てずリースすることが多く、助成金の対象外になることが多い。宮城県の制度も同様だったので本庁とも相談し、実勢に合わせるように改め、リースする場合でも雇用人数に応じて助成金を付け、進出企業に喜ばれるようにした。

さらには、都内の中小・中堅企業の多くは移転したが、まだ残って操業を続けている企業もあり、周辺住民からのクレームや諸々の規制の強化で移転を迫られているケースが出てきている。そのような企業へのアプローチの戦略を考えたり、あるいは直接企業誘致には結びつかないが、企業訪問で得た県に役に立ちそうな情報を提供するなどしている。

契約は、最初1年契約であったが延長され、さらに2007年春まで更新されることになった。今年は、また新しいターゲットを考え挑戦したい。過去2年を振り返ると、最初のころ立地は海外しかないという反応のみであったものが、最近は景気も良くなったのか、企業の方から土地の引き合いがくるなど環境も変わってきており、追い風が吹いてきたようだ。毎年いくつかの自治体が新たに募集しているので、皆さんもトライしてはいかが。

## ABICと私

たかはし せいぞう  
高橋 征三（元日商岩井）

私は1997年に35年間勤務した日商岩井株式会社（現在の双日株式会社）を退社し、現在のキーリサーチネット株式会社（Key Research Net Corp）を設立しました。日商岩井時代は、化学プラント、新事業などの業務を担当し、退社する直前4年間はジェトロ（日本貿易振興機構）の農水産部に出向し、日本向けに農水産物や食品輸出したいという海外の企業への、対日輸出のコンサルティングの仕事をしていました。日商岩井を退社するときに、ジェトロのような仕事が民間ベースで出来そうな気がしたため、今の会社を設立しました。そして欧米諸国やアジア諸国の企業の依頼を受けて、主に食品分野での対日輸出コンサルティングの仕事を行っています。

ABICとの最初の仕事も、食品の対日輸出のコンサルティングで、ABICがジェトロから2004年秋に受注したアンデス地域の乾燥果実の対日輸出のコンサルティングの仕事でした。コロンビアおよびボリビア産の乾燥パイナップル・マンゴ・バナナ・ほおずきが果たして日本のマーケットに受け入れられるかという調査です。サンプルを日本の乾燥果実の輸入企業に持ち込み、評価をしてもらった結果、パイナップル・マンゴ・バナナは既に東南アジア諸国から数多く輸入されているので、可能性はほとんどないが、ほおずきはまだ日本に輸入されておらず、面白い商品であるとの評価を得て、現在2社が輸入を始めています。

この乾燥果実のマーケット調査とほぼ同じ時期に、宮城県から宮城産の食品の首都圏でのマーケティングを行ってくれる人がいないかとの照会がABICにあり、



宮城県内食品メーカーの水産加工工場を訪問（筆者中央）

「高橋さんやって頂けますか」との話がありました。私の専門分野は輸入食品のマーケット調査で、国産製品に関してはこれまでやったことはありませんでしたが、マーケティングの手法や潜在顧客は輸入品と共に通するものがありましたので、お引き受けしました。

関連メーカーは10社あり、これらのメーカーが作っている鯨やサンマ、めかぶの加工品などの水産加工品、牛タンカレーや赤豚のハム・ソーセージといった畜産加工品などの首都圏の卸企業、小売店、レストランなどへの売り込みです。対象のほとんどの商品は全て似たような製品が既に数多く首都圏のマーケットに出回っており、売り込みに苦労しましたが、鯨加工品とめかぶの加工品は、レストランや小売店に採用され、現在も続いている。

現在マーケットに出回っている商品と競合する商品は、品質が飛び抜けて良いとか、価格が大幅に安いなどの特徴がないと首都圏の顧客はまずのってこないのですが、乾燥ほおずき、鯨加工品、めかぶ加工品といった、まだマーケットにあまり出ていないめずらしい商品には、輸入品、国産品を問わず、まだまだ大きなマーケットが潜在するということを、今回の調査を通じて改めて認識した次第です。

受けました。

オーストリア大使館での事前打ち合わせでは、正・副商務参事官と実務担当の邦人スタッフから、旅程表につき説明があった。特殊な金型を日本自動車メーカーおよび関連会社の海外進出先へ売り込みたいとのことで、6日間で北は宇都宮から南は広島まで15社を回る強行軍であった。昭和40年代に課長代理か平社員のころ経験していたようなアテンドだが、私自身はこんな過密スケジュ

## オーストリア金型メーカーの訪日アテンド記

おかみや ひろし  
岡宮 宏（元三井物産）

昨年11月、ABICの大迫コーディネーターから、オーストリアの金型メーカーの独語通訳のお話があり、自動車車体製造設備（工作機械、プレス、金型等）は現役当時経験した分野なのでなじみもあり、即座にお



## 国内での活動

ールを立てたことはなかった。定年後10年の体がもつか不安はあったが、乗りかかった船で挑戦してみるとこにした。

11月末、オーストリア人2名が来日して再度詳細説明があった。日本では全く実績がなく無名だが、高抗張力（引っ張り強さ）特殊鋼板用金型に独特の技術を持ち、いわゆるニッチ狙いで需要を開拓したいと言う。プレス金型では製品に発生する皺や裂け目をいかに防ぐかが肝要だが、特にこのような材料を冷間（経費・エネルギー節約のため加熱せずに）成型するには長年蓄積された技術と経験が必要とのことである。製品としては、自動車の外板に覆われた各種構造部材（例えばドアの内部に組み付けられた横からの衝突に備えた棒状部材）があり、成型が難しい形状のものが多いとのことであった。話は理解できたが、経験上、日本の自動車業界に新しい生産設備を売り込むのは容易でなく、今ごろやって来て果たして相手にされるのか不安

であった。

しかし、実際に回ってみると、技術に対する評価は高く、質問は極めて熱心であった。ところが価格レベルについての手を替え品を替えての質問には、なぜかかたくなに「競争力はある」と繰り返すのみで失望した。もし私が担当者の立場だったら話が先につながる対応をするよう説得するところだったが、抑えて通訳に徹した。結局「ニーズがあったら連絡する」という先がほとんどだったが、1社だけ具体的引き合いを出すという企業があったのは収穫だった。日本の金型メーカーは自動車産業の好況で現在満腹という好機を逃さぬよう切望する。

ところで、ある会社で通訳がなぜ専門用語に詳しいのか聞かれたが、現役当時の職歴を説明し納得された。

なお、言語については、オーストリア人は英語もでき、海外生産との関連で訪問先に英語の分かる人もおり、状況に応じ、英語、独語を併用した。

## 教育

### 大学等講座での活動

#### 商社マンから大学教授へ…！

帝京大学経済学部教授

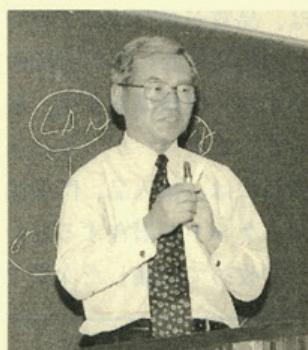
志賀 隆（元伊藤忠商事）

1月12日（木）4限目の授業が、無事に終わった。なんとも言えない充実感、内からこみ上げてくる満足感が心地よく全身を走った。2005年4月より、期待と不安を感じながら恐る恐る引き受けた、帝京大学経済学部新

米教授の初年度最終講義が終了した、記念すべき瞬間であった。

一昨年の夏、ABICより1通の案内をいただいた。「来春より帝京大学で教授職1名を募集する」とのことである。そのとき、私は65歳。サラリーマン生活最後の勤めを終え、これからは好きなことをしたいと思っていた。その中の1つが、若い人と接点を持つことであったので、迷うことなく応募した。

2005年4月1日、帝京大学経済学部経済学科教授の辞



令を受け、3教科4講座を受け持つこととなった。私の担当教科は、「企業戦略論（3、4年生）」に「英語経済文献1&2（2年生中心）」と「文章表現（1年生必須）」で、週に4回の授業を行うというもの。1回の授業は1時間30分で、週に合計6時間、年間だと30週で合計180時間になる。この時間は教壇に立ち、ほとんど1人で話し続けるというのは相当な肉体労働であり、加えて教科ごとに、年間30週の講義内容を作らねばならず、不慣れな新米にとり初年度は何とも忙しく働いたとの実感が残った。

1年間を振り返っての率直な感想は、若い人たちと身近に接することで、彼らをより理解でき、より好感を持つことができたことだろう。われわれ大人は、大胆に激しく変わっていく若者のファッションや外見の奇抜さに驚き、一部のマスコミ報道に踊らされて、「今の若い者は」と不必要的距離を置くことが多い。確かに



に教室内で、帽子をかぶる、飲み食いをする、私語はする等、当初はあきれることがあったが、一度二度明確に注意をすると、驚くほど従順に守る。極めて素直である。小、中、高校で教えるべきときに教えてない、叱るべきときに叱ってない大人の責任が大きいのではないだろうか。

この4月から、新聞を中心に、生きた企業経営戦略を学ぶゼミナールを開講することになった。教師と学生、また、学生同士で討論、議論をする場の必要性を感じたからである。通常の授業では、人数が多く、双方向の意見交換や討論はほぼ不可能であるため、学生にその点を力説し、志賀ゼミの学生を募集した。経済学部に約30ゼミのある中で、新設の志賀ゼミの応募者数が2番目に多かった。学生もこのようなゼミを求めていたのだと、この結果にわが意を得たりと思い、しっかりと取り組むための準備に取りかかり始めた。

ABICの会員がその幅広い生きた体験を、分かりやすく具体的に学生に教えることは、非常に意義あることである。長年培われた経験やその経験に裏打ちされた講義は、今後ますます大学教育の中で重要視されいくことだろう。

そのように考えると、私も先達の1人として責任の重さを感じ、身の引き締まる思いでいっぱいである。

## 立命館APUにABICが3講座開設

2005年度秋セメスター（2005年10月～2006年1月）に、立命館アジア太平洋大学（APU）アジア太平洋マネジメント学部（APM）にABICの特色を生かした「国際貿易論」（日本語）、「International Trade」（英語）および「アジアの投資戦略」（日本語）の3講座（各14回）を開設できた。

APUは、立命館大学により「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念（開学宣言）として、大分県と別府市、国内外の広範囲な人々の協力の基、2000年4月1日に別府市十文字原に設立されたユニークな大学である。21世紀におけるアジア太平洋地域の平和で持続可能な発展と多様な文化の共生を目指し、未来創造に貢献する有為な人材の養成と新たな学問の創造を目的としている。従い、1学年定員「アジア太平洋学部（APS）」500人、「アジア太平洋マネジメント学部」500人、計1,000人の内、約半数がアジアを中心とする世界各国からの留学生である。05年11月1日現在学生数4,381名（学部4,178



名十院生203名）の内、1,874名（43%）が世界74カ国からの留学生である。カセム・モンテ学長（スリランカ）を始め、教職員も約半数が外国籍という「マルチカルチャラル・コミュニティ」の中で学生と教員が一体となり、民族・宗教・文化の違いを認め共に学び相互に理解を深めるという国際色豊かな環境を備えている。さらに、多言語環境の中で、日英二言語による教育システムを取っており、ユニークなカリキュラムを構築している。また、キャンパスは別府市郊外（車で約30分）の山頂十文字原に広大な敷地に展開しており、恵まれた学習・研究環境にある。

APUからの講座開設依頼は、現在APU兼任講師の谷川会員（現大学コーディネーター）が昨年4月、同校にABICを紹介し、早急に話が進んだものである。「国際貿易論」は、世界経済と国際貿易、国際収支と国際経済取引、貿易の国際的な枠組み、主たる地域の経済・貿易動向、グローバル経済と貿易システムの将来、環境汚染や食料・資源問題、IT化と貿易システムの変遷、など世界貿易に関連する諸問題について、9名の講師が日本語1コマ（90分授業）と同じ内容のものを英語で1コマ行うというAPUならではのChallengingな授業なので、ABICの特徴を生かせる優れた講師を推薦すべく公募の形をとった。多数の応募を戴いたが、最終的に海外経験や実績の豊富な9名の講師を推薦することができた。

「アジアの投資戦略」は、7月末に依頼があり早急に講座組立を行う必要があり、同様テーマに精通したABICの講師経験者7名の方にお願いすることにした。日本を先頭とする東アジア諸国の雁行型発展を経て、 ASEANへの直接投資による垂直分業、さらに水平分業に発展する背景、中国の急台頭、グローバル化と二国間FTAやASEAN自由貿易協定、東アジア共同体の浮上などについて14回の講義で解説した。各講師のご

## 国内での活動

尽力により、3講座とも高い評価を受けることが出来た。来年度も、「国際貿易論」(日本語)・(英語)の2講座は継続の予定で、さらに「Business Communication」(英語)講座を新たに開講予定である。

### 立命館アジア太平洋大学(APU)と学術交流協定書を締結

立命館APUとは、昨年秋セメスターに「国際貿易論」(日本語)・(英語)2講座と「アジアの投資戦略」(日本語)1講座、合計3講座を開講するなど関係強化が進んでいる。昨年末にAPUから、さらに提携強化・拡大を目的として、学術交流をはじめとする連携と協力を促進し、教育、学術研究および民間レベルにおける社会貢献活動に寄与するための包括契約をABICと結びたいとの提案があった。

1月16日、吉田理事長および野津事務局長が別府市のAPUキャンパスを訪問し、APUカシム・モンテ学長およびABIC吉田理事長との間で下記内容の学術交流協定を調印した。

「APUの講座および各種プロジェクトの実施協力、キャンパス外での学習関連協力、共同研究プロジェク



左からAPU林副学長、甲賀学長補佐、ABIC吉田理事長



APUカセム学長を囲んで  
左から APU横山教授、林副学長、カセム学長、  
ABIC吉田理事長、野津事務局長

ト、教材開発および人材育成分野における相互協力、社会貢献活動への協力など」

今後、両者で具体的な案件を提案し、相互協議の上実施のプログラムを策定していく予定である。同様の包括契約は、2004年に関西学院大学と締結し、いくつかのプロジェクトが進行中であり、今回のAPUとの協定によりABICの社会貢献活動がさらに拡大し、社会的評価が高まるものと期待できる。

(大学等講座コーディネーター もり かずしげ 森 和重)

### 小中高校向け「国際理解教育」

#### 国際理解—高校教育と 校外企業人講師の協力関係について

#### 横浜商業高等学校国際学科の研究発表会に招かれたABIC講師

昨年12月12日、横浜市立横浜商業高校の国際学科(以下Y校)にて生徒による研究発表会があり、ABIC講師が招待されました。国際学科は2003年にスタートし、その1年生の国際理解授業に「世界を知ろう」シリーズでABIC講師12人が派遣されました。このときの1年生が今3年生となり、それが自主的に選んだテーマで研究した国際理解問題について、後輩の1、2年生を前に研究成果を発表するという授業に、当時1年生を教えたABIC講師も招かれたのです。

教育というのは、高校なら3年という年月をかけてある目標を達成するロングランの仕事で、校外講師が出るのは年1回だけですが、ただ講義すればよいというものではなく、それがどのような教育課程の中でどういう役割を果たすのかを、校外講師が認識して講演・講義を行うことが重要と常々考えてきました。今回そのフルーツを見る機会ができたので、2003年度に担当した講師に声をかけたところ、授業が朝早いにもかか



教え子の発表を参観するABIC講師



生徒の発表と質疑応答

わらず6人の講師が参加されました。

授業は階段式の視聴覚教室で行われ、4人の3年生講師（いずれも女子生徒）が次のような自主研究テーマの発表を行いました。「アイヌ民族の独自文化と彼らが受けた生きた迫害」「開発途上国の子どもたち」「世界における地雷問題」「韓国に対するイメージ」。

決められた時間は1人15分間、10分経ったとき、先生がチーンとチャイムを鳴らすと後5分で終えなければなりません。各自はA4 1枚に要領よく要旨をまとめたレジュメを直前に配り、パソコンを駆使して、スクリーンに説明や写真を次々に映し出して、実際に堂々と発表していました。レジュメは穴埋め方式に作られており、講義を聞いてないとよく分からなくなる、これは上手い方法だとABIC講師が感心することしきりでした。

全部の生徒が決められた時間内に発表を終えたのは見事でした。また各自発表後1、2年生からの質問を受けたのですが、その受け答えも「知らないことは知らない、自分はこう考える」というしっかりしたもので、生徒の成長ぶりにABIC講師一同すっかり感心しました。

国際学科の目標は「国際感覚」「コミュニケーション」「問題解決」の3つの能力の育成滋養です。このハキハキ意見を述べる生徒たちを見て、先生達の目標は達成されたと申し上げました。私達企業人がどのように教育にかかわればいいのか、一生懸命考えながら3年間取り組んできましたが、一番の成果はY校の催しに3年前の講師が朝早くから駆けつけたという、授業を愛する企業人と学校との心の交流関係ができたことではないかと思います。

これからも受け継がれていくであろう小さな国際人の卵の育成に、このようなABICの企業人による教育協力関係が続くことをコーディネーターとして心から念願するものです。

## 日本の学校に入学てくる 外国籍の小・中学生への日本語指導

ABICの小・中・高校向け講師派遣グループでは日本人の児童・生徒向け「国際理解教育」に講師を派遣する以外に、日本の学校に転入学てくる外国籍の小・中学生に「授業についていけるように」「学校生活に馴染むように」日本語の教育と適応教育の講師派遣を行っており、大変効果を挙げていることをご紹介します。

東京の周辺地域は都内より外国人家族の居住人口が多く、「日本語指導のニーズ」も高い。東京都多摩市より2003年度より依頼を受け、3年間で23件、28人の外国籍小・中学生の指導を行いました。毎週1回2時間の個別指導を約6ヶ月間継続します。

親が長期在日の場合、子供を日本の学校に入れたいと思っても、「言語」の問題と「習慣・制度」の違いは大きく、友達が出来ない、学校に行きたくないなど、私たち商社駐在員時代の子女教育の裏返しです。先生は一人の外国人生徒の指導に掛かりきりはできず、元教員とか地域のボランティアで臨床的に対応されているケースが多いのですが、何分相手の言語が判らないでは親に連絡事項や指導方針を伝えることさえ困難です。

そこでABICの出番となります。今までにABICが指導を受け持ったのは、中国語（北京・ウイグル・台湾）、タガログ語（フィリピン）、ハングル語（韓国）、ロシア語（ロシア）圏の子供達で、英語ができる子供は極めて少数です。一方、元商社マンは海外駐在経験豊富で、英語のみならず

現地語練達の士も多く、また現地事情だけでなく現地の人の気質を理解している人が多いのです。まず子供の心を打ち解けさせることができます。それが言語の指導のみでなく、本人・保護者の教育方針上の色々な相談に乗ることに大変役立っているのです。

中学生になると高校受験が控え、保護者も本人も悩みますが、ABIC講師の指導で都立高校に合格したケースも生まれました。それはひとえに地方自治体が予算をとりABICを起用する施策を取ったお蔭で実現した



多摩市の小学校にて  
右から 花井講師、フィリピン女子児童、  
藤村コーディネーター

## 国内での活動

わけで、親も本人も自治体も、そして講師も大変喜んだ意義深い成果でした。

今年度半年間受け持ったABIC会員の教育実施報告の概要を現場報告の一例として以下にご紹介します。

講 師：出口 孝嗣（元住友商事）

『日本語・適応』教育実施終了報告

対 象 者：多摩市立某中学1年生（男子）

フィリピン国籍

教育期間：2005年6月～12月（6ヶ月）計23回

- 来日直後で日本にまだ不案内の生徒に対する特別な指導を行うこの施策は、極めて貴重かつ有意義であると感じた。

- 個別指導があるので、本人の資質を見て能力等を引き出せる絶好の機会であると考える。

但し、その効果は本人の意欲と環境（特に家庭環境）に大きく左右されると言える。この生徒は、家庭で家事手伝いをしているため（フィリピンでは一般的に子供が親の手伝いをするのはごく普通）学習時間が限定され、宿題を出してもできてこないことがほとんどで、日本語を特別に学習する時間は小生の週1回のみ。従い指導進度は遅々としたものになった。

- 但し、この時間を通して日本における学習のあり方及び方向性が少しでも本人と親に伝わったと信じる。本人に欲が出てくればその方向に進んでくれるものと確信する。

- また、本人への意欲を持たせる一環として、英語は同級生に比べるかにレベルが高いので、特に試験対策にアドバイスを行った結果、英語の成績だけは満足できる結果を得られた。

（国際理解教育講師派遣コーディネーター 藤村 登）

## 関西での活動

### 北陸大学の想い出

ABIC関西デスク

大学等講座コーディネーター

赤田 堅（元丸紅）

昨日、北陸大学での最後の講義を無事終了いたしました。2002年4月8日と9日、和田さん（ABIC大学等講座グループ・コーディネーター）とフレッシュマン・セミナーに参加して以来、4年間にわたり幸せな出会いと経験をさせて頂きました。

## ABIC・関西学院大学との共同プロジェクト

### アメリカ理解教育の普及活動

3月3日、JICA兵庫国際センターにて、兵庫県高等学校教育研究部会第76回研究会で表題プロジェクトの発表を行いました。本プロジェクトの座長、テキストの編者関西学院大学の藤沢武史教授がプロジェクトの意義、概要を説明、同教授および宝塚西高校の野村和弘教諭がご自身の担当されたテーマを発表されました。

両先生から、教育関係者だけでなく社会人（NPO法人ABIC）との協働で新しい出会いがあり、大変有意義なプロジェクトになったとの報告があり、出席された先生方のABICへの関心も深まりました。

ABICでは、本年4月のテキスト刊行に先駆け、すでに兵庫県立国際高校でテキスト執筆者のABIC会員野村哲三氏が、宝塚西高校で同執筆者のABIC会員高田忍氏が表題の出前授業を実施しました。4月から首都圏、関西圏で本格的に出前授業を展開する予定です。



受講生の多くは中国からの留学生で、授業は出来るだけ黒板を使い、漢字で書き、話し方も出来るだけゆっくりを心がけましたが、留学生諸君に果たして理解頂けたのか、心もとない次第です。週末には、これも最後の試験の採点をしますが、漢字の国だけあって、書く方は問題ないのですが、ヒヤリングは大変なようです。

我々ABIC講師担当の授業は、午後の1時限目です（13：45～15：15）。私は、

現在、阪神シニアカレッジを受講中ですが、昼過ぎの授業は睡魔に襲われます。まして中国からの留学生諸君にとっては、次のような話を聞いたことがあります。「彼らの日本における生活費は相当厳しいものがある。しかし彼らを雇用してくれるバイト先は、金沢ではせいぜい食堂の皿洗い程度で、宿舎に戻るのは午前様に



雪景色の校舎

なる。授業中の睡眠は大目に見てやって欲しい。」

それでも、眠らせないのが、講師の腕でしょうが、私はそうは参りませんでした。しかし熱心に聴いてくれた学生、的を射た質問を授業後あるいはメールでしてくれた学生も何人かはおりました。

大阪発9：42、金沢発16：52のサンダーバード。これが私の定番でした。大阪～金沢は約2時間半で、往は授業の予習、復は「万歳楽（花伝）」の冷やでゆっくり開放感にひたる、時には「黒百合」（金沢駅構内のおでんや）に立ち寄ることも楽しみでした。雪のため休講ということも何度かありましたが、本年度もほぼ順調に授業が終わろうとしております。

来年度も講座が継続されることとなりましたが、新しい布陣での講師各位のご健闘を祈ります。最後に、この講座に当初よりご尽力頂きました入院中の高田先生の一日も早いご回復を祈りつつ想い出の手記とします。

（2006年1月26日筆）



留学生と高島会員

## ABIC講師が東京国際交流館 「国際塾」講師

50ヵ国、1,000人近くの在日留学生とその家族が居住する、台場にある東京国際交流館でABICが、留学生支援活動を始めて6年になります。昨年度は日本語研修、日本文化交流などに延べ2,000人を超える留学生が参加し、交流が活発に行われました。

また、商社の豊富な人材と知的財産を活用し、留学生との研鑽・交流をするという企画を以前から交流館に申し入れをしてきましたところ、さる2月13日、東京国際交流館の「国際塾」でABICとしては初めて講演をすることができました。「国際塾」は、同館が在館留学



生向けに外部より講師を招聘して年間に数回開いている研修講座で、今回は本年度の4回目に当たります。

当日は午後6時から、留学生30人が参加し、ABIC会員で三菱商事株顧問（元副社長）の高島正之氏が講師として「企業の海外戦略」について講演をされ、質疑応答が活発に行われました。その後に行われた懇親会でも講師を囲んで交流を深め、密度の濃い2時間でした。留学生からは、時間が足りなく残念であったという感想がありました。

今後も引き続き、ABIC講師による講演を定期的な企画としていただけるよう、交流館との連携を深めていくことが肝要だと思っております。

（留学生支援グループ）

## 賛助会員入会のお願い

国際社会貢献センターの活動にご賛同頂き、賛助会員として資金的援助をしていただけける個人の方や企業、団体のご登録をお願い申し上げます。

年会費 個人：1口 5,000円 法人・団体：1口 10,000円

### 賛助会員

#### 法人（3社）

〈60口〉 (株)東京リーガルマインド

〈1口〉 (有)イーコマース研究所

キーリサーチネット(株)

#### 個人（292名）

(敬称略・氏名五十音順)

〈2口〉	荒木 道介	井口 義弘	岩本 洋之	上田 博景	遠藤 寿一	及川 洋	小寺 真行
久佐賀義光	公平 伸夫	笹井 英毅	高廣 次郎	多田 勝彦	玉木 興島	綱川 渡	友國 洋
新田 充成	原 芳道	坂東 寛隆	日野 勝子	藤井 眞	前田 玄史	牧村 恢臣	三木 紀元
柳沢 信義	山田 芳正	山本 一良	山本 忠彦	山本 寧雄			
〈1口〉	会川 精司	赤田 堅	浅香 正美	芦田 均	東 光子	安達 晋	安福 哲一
安部 忠	阿部 徹	阿部 雅志	荒尾 紀倫	有田 五郎	有田 捷一	庵原 専三	伊賀 豊和
伊賀山欣也	猪狩 真弓	生島 幸哉	池崎 元彥	石田 錠二	石束 吉孝	石橋 満	一色 修二
伊藤 輝雄	伊東 泰	稻永 丈夫	今井 正孝	今田 利征	上田 博晟	上田 煦	上野 和郎
上森 義美	宇佐見和彦	宇田 定三	内田 英三	内田 康治	漆崎 隆司	江藤 茂雄	榎本啓一郎
江幡 吉信	海老原 茂	大久保徳衛	太田 宏	大塚 昭雄	大西 稔男	大道 豊彦	大森日出太郎
大矢 徹郎	岡田 一茂	岡田恵二郎	岡部 紘	岡部 好夫	岡本 靖彦	小川 晴久	小口 良喜
小國 輝雄	小野 勝	小畠 克之	小船井達夫	表 尚志	角井 信行	風間 誠	梶原 昭次
加藤 克	金井 好弘	金子 康之	金子 義久	嘉根 俊治	唐澤幹太郎	辛島 洋	加輪上敏彦
川副 和之	川西 勇夫	川村 哲也	川本 恒彦	菊池 正郎	岸 達也	喜多 創平	吉川 和夫
木村 好作	木村 秀志	久木田修司	楠井 裕章	門座 武敏	久保田堅一	隈元 泰弘	倉又 則夫
黒岩 浩一	黒岡 誠一	国分 利敬	古園井 良	小畠孝治郎	小林庄右エ門	小峯征三郎	小宮山 徹
近野 治夫	齋藤 勝吉	坂井 啓治	酒井 満	坂本 俊寛	崎 貢	笛岡 治男	佐藤 一雄
佐藤 徹	佐藤 宏	佐藤 充宏	佐藤 隆二	佐良木忠男		澤田 豊治	七字 道彦
篠原 勉	渋谷 和明	島 悠紀夫	白土 茂雄	須賀 徹	須賀直比古	鈴木 孝尚	鈴木 紘司
関 統造	関 晃典	関本 喜茂	曾我 典夫	醒醐 俊明	高木 俊彦	高木 裕昭	高崎 浩敏
高嶋 宏臣	高嶋 正文	高田 弘	高田 惟有	鷹津 俊一	高津 治夫	高梨 和彦	高橋 洋
宝田 登	立石 揚志	田中 昭彦	田中 功	田中 剛	田中 則一	田邊 肇	田邊 正明
谷川 達夫	田内 裕	田村耕一郎	淡野 武司	丹治 敬	千野 滋樹	千原 長美	塚谷 正彦
辻 萬亀雄	津田 道夫	土屋 英五	坪井 哲夫	寺澤 昌敏	戸川 順治	戸川 隆夫	徳田 裕志
富島 紘一	戸谷 裕	長嶋 昭美	中倉 弘紀	中込 喜雄	中島幸太郎	中島 隆一	中園 智子
永田 明司	仲田慎太朗	中西 孝之	中西 篤行	中西 康孝	中野 正義	中野 英俊	永峰 千年
中村 紀雄	中村 恭紀	中山 文麿	西山 慈恩	新田 耕治	野口 順一	信森 勝治	野村 哲三
則満 洋祐	萩谷 敦	橋口 昭八	橋本 裕一	橋本 文男	橋本 政彦	橋本 勝	畠 宏幸
花澤 和郎	羽生 憲夫	林 常介	日笠 徹	菱川 治	日比野圭三	平野 潤	平野 實
廣田 幸男	廣田 滋	深澤 満穂	福田 和義	福田 繁	福ノ上 敦	藤井 希祐	藤井 則雄
藤川 一弘	藤田 政晴	藤田 幸雄	藤原 照明	布施 克彦	細野 良敦	前田 喜章	前田 直明
増田孝次郎	増田 政靖	松井 清治	松浦 義則	松岡 壽夫	松下 敏明	松村 茂	松本 信司
三上亜佐橋	翠 政之	溝潤 弘也	道廣 健吾	三栗 敏	南 賢	峯本 晴輝	宮内 貴正
宮川 正裕	宮崎 善嗣	宮田 修	村瀬 和男	村瀬 省三	村林 荣彦	森 和重	森 健
森田 舜	森 達也	森松 直毅	安田 佳苗	矢野 清一	矢野 裕明	敷内 晋	山岸 正雄
山口 健	山口 真人	山田 信一	山田 雅司	山中栄三郎	湯浅 康生	萬木 寛	横井 正豊
横田 淑子	横溝 肇	横山 泰雄	吉田 紘	吉田 益坦	吉富 茂隆	李 栄	渡邊 晴郎
渡辺 宏							

活動会員 1,542名

(2006年2月28日現在)